「クリエーターの話　～ 私のイメージの源泉」

スペースデザイン部会員　藤原 郁三

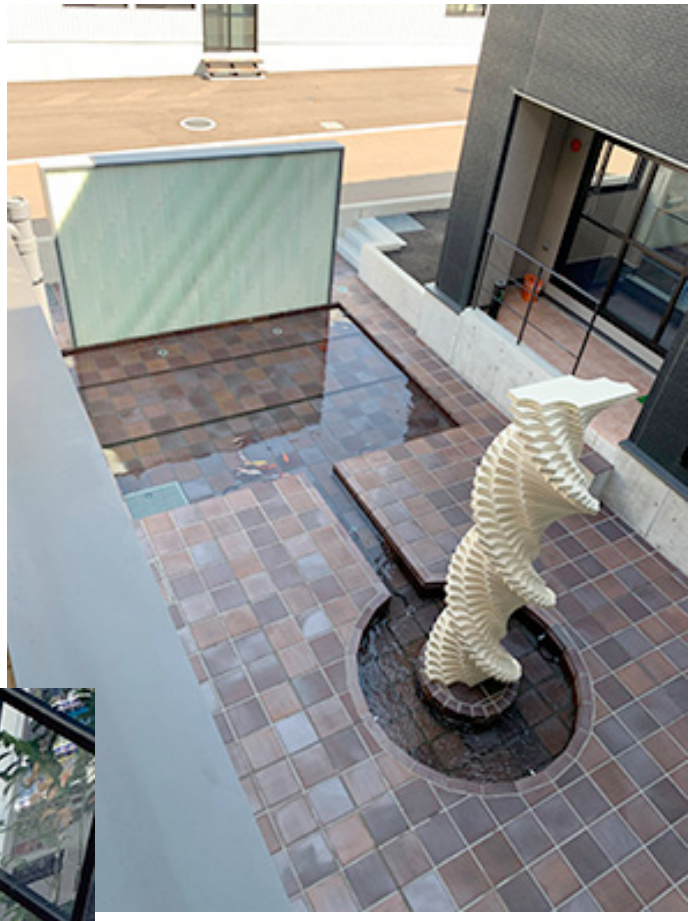
『 大地のロマンを求めて』

壁のルーツは洞窟の壁、すなわち地球の断面です。従って、陶で壁面を創るということは、大地の再構成だと思っています。（いい変えれば大地のリサイクルだということも出来ますが、その考えから、後に蛍光管廃ガラスをリサイクルした「蛍硝子」を開発したのですが、その話は別の機会に）

建築の壁には洞窟の壁のような物理的な奥行きはありません。ですからイメージとして大地の断面であるかのような無限の奥行きと広がり、そこに密む大地のロマンを表現したい、それが私の陶壁に対する基本ポリシーです。

栃木県立博物館（1982 年）白い大地ー空間（褶曲）

又、陶モニュメントを創る場合は、やはり環境アートとして一般の彫刻作品のように完結する形体は求めず、常に空間への広がりを意識して、上昇、増殖という形体の連続性を求めます。



空への階段（2023 年）

この作品は「カツデン」という階段をつくるメーカーの鳥取工場研究所内中庭のモニュメントです。「生命は飛躍するよりもむしろ回転しながら」の例え通り、大地から空へ回転しながらどこまでも上昇していく形にしました。ちなみに、つきあたりのスクリーンはテーマが「波の階段」で蛍硝子の作品です。
環境アートは、その作品がどのような場所に設置されるかが、制作上の大きな条件になります。その上、モニュメントは与えらた「場」の特性を考慮し、その「場」に関する記念し、賞賛する概念を象徴しなければならないという制約があります。モニュメント造形は空間への配慮という立場から、それを要望する施主側に対してどうしても受け身になりがちです。（カツデンのモニュメントも与えられたテーマが階段でした。）

逆に、こちらからモニュメントのある空間を積極的に提案していきたい。その為にも、より自由な立場で、制約なしの作品を創りたい。そう想うようになり、モニュメントへのオマージュとして、陶のオブジェ作品を創るようになりました。
最初の作品が栃木県立美術館主催の「千年の扉」展に出品した「饒舌」です。

饒舌（1987 年）

最初に述べたように私は常に大地のイメージをテーマにします。特に大地の有機性を大切にします。「生命は土のお化け」だと思っています。
この作品は、大地は巨大な生命体と考えて、そこから飛び出した「舌」を表現しています。
大地の舌が次第に強くふるえ出す様を連続した舌の表面のウエーブで現わし、大地の有機的なエネルギーを
象徴させました。
以来、私はオブジェを単体で完結させず、複数体の組み合わせによる形のグラデーションで表現するようになりました。この作品を見た新制作の会員の一人が、新制作展に出品することを強く薦めてくれました。
「数ある団体展の中でスペースデザイン部があるのは新制作展だけ、毎年、東京の中心で自由に発表出来るのは、あなたの環境アートの作品にとってもかならず良い刺激になるから」と説得され、2 年後に初出品、初入選したのが「波形のヴァリエーション・ドキドキ」です。

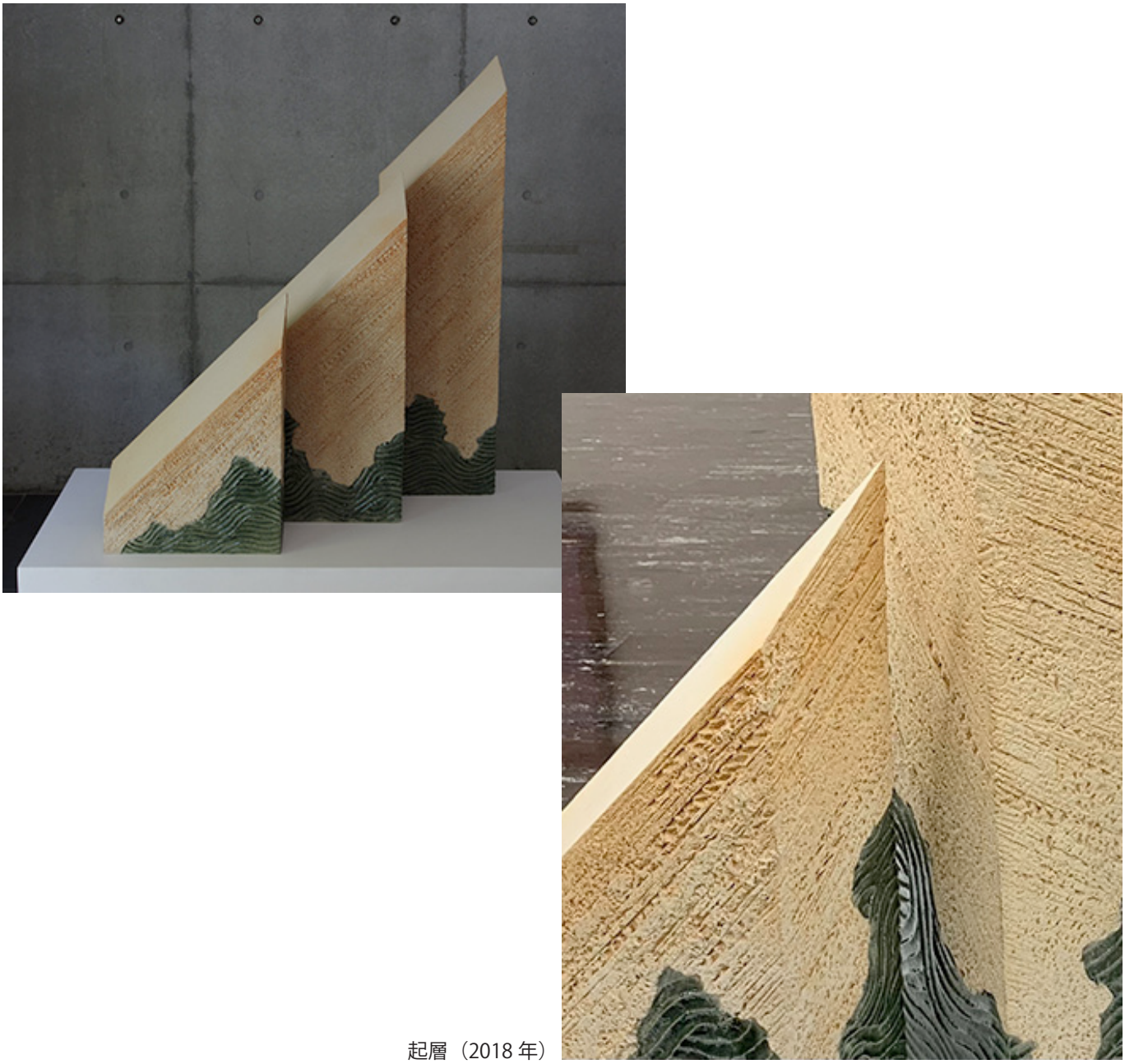
波形のヴァリエーション・ドキドキ（1989 年）

この作品は「饒舌」の時の発想を、スペースデザインとして生活に場に取り込みたいと考え、椅子として提案したものです。
現在では椅子のデザインは、その機能美を考え、座り易い形体が求められますが、かつてはそうではありませんでした。
岡本太郎の作品に「座ることを拒否する椅子」という作品があります。これは椅子をオブジェ化することで、逆説的に椅子とは何かを問いかけています。
人は本来、自然の中の倒木や切り株、あるいは岩等の上に腰掛けていました。決して座りごこちの良いものとはいえないものです。座るモノがない時は蹲踞の姿勢を取っていました。いわゆるヤンキー座りです。東南アジアでは、今でもこの座り方を良く見かけます。あれはヤンキー特有の風俗ではなく、一種の先祖返りではないでしょうか。

「大地に腰掛ける」そうして自然と一体感をたもつことで自然に守られてるような、やすらぎ、安心感を得る、それが椅子の原点だと思っています。
従って「饒舌」で表現した大地の鼓動を椅子に置き換え、発想したのがこの作品です。決して座りごこちを求めたわけではありません。
ちなみに、青から赤への色調の変化は高揚感を表すと同時に、はたして新制作展に入選出来るかどうか、そのドキドキ感をも加味しています。初出品、初入選の記念すべき作品になりました。

段々（1992 年）

この連続形の作品の集大成が「段々」です。この作品で新制作展新作家賞を受賞しました。
大地から突き出た陶柱が、活断層のようにスパッと切れてズレが生じ、それが次第に増えていく形です。活断層は大地の強力なエネルギーで発生します。地震のもとです。さらに大きくとらえれば、これは「大地の褶曲」につながり、巨大な山脈も、大地の起伏も、すべてこの褶曲からつくられてます。しかも、地球は今も止まることなく動き続けているのです。大地の危うさを意識した作品です。そのため作品展示は屋内であっても作品写真は屋外で撮りたかったのです。
この小さな作品にこんな大きなイメージを込めました。



起層（2018 年）

4つ目の作品は「起層」です。2019年の89回新制作展委員長に就任させていただいた時、ポスターにさせていただき光栄に思っています。
大地の表面は常に新陳代謝し、それが年輪のように積み重なって地層を形成します。地層はその下にあるマグマ、すなわち地球のエネルギーの動きに大きな影響を受けます。時として、起き上がることもあります。
そんなイメージを求めて造形しました。
粘土は加圧によって自由に形がつくれる、可塑性という優れた性質があります。柔らかい地面に足跡がのこるのもそのせいです。従って、陶芸は古来より土器や土偶のような様々な生活必需品を作るための、最も身近な加工技術として発達してきました。
この「起層」の表情は、粘土板の表面をノコギリ歯で引っかいて作っています。その時、浮き上がった粘土クズを取らないでバレンで押さえ付けると、そのままノコギリ跡のクシ目の表面に定着し、自然の地層のような偶然の表情が出ます。粘土の可塑性を生かした技法です。下の方は対照的に渦のようなウエーブの彫刻して、そのコントラストで形体に緊張感を与えました。

以上、大地の持つ生命体、褶曲、積層という 3 つの特性をイメージしながら創った作品を主に取り上げました。環境アートはかならずテーマが与えられます。例え抽象彫刻であっても、作品コンセプトをぬきに創作は出来ません。私の場合はそれを常に「大地とは？」から発想しています。

藤原郁三 プロフィール

1946　大阪に生まれる
1970　東京芸術大学美術学部日本画卒業
1970　㈱河合紀陶房に入社
～ 74　河合紀氏に師事し、陶板レリーフ制作
1975　益子にて独立
1983　藤原陶房を設立
1989　新制作スペースデザイン入選
1992　陶壁作品集（京都書院）出版
1992/93 新制作スペースデザイン新作家賞受賞
1994　新制作スペースデザイン会員推挙
1995　陶彫邪鬼展（以後、新宿伊勢丹、
　　岡山天満屋京都大丸、大阪阪急、
　　各ギャラリー等　全国各地で毎年開催）
1996　日本現代陶彫展特別賞受賞（土岐市）
2003　邪鬼 - 藤原郁三陶彫集（叢文社）出版
2007　パリ日本陶芸展
　（エスパスベルタンポワレギャラリー Paris France）
2008　栃木に潜むチカラ展（益子 陶芸美術館）
2012　蛍硝子が第 4 回ものづくり日本大賞 優秀賞受賞
2015　藤原郁三 環境陶芸展
　（東大阪市民美術センター）
2017　藤原郁三の環境陶芸展
　（アメリカオハイオ州、ダブリンアートセンター）
2019 「陶壁 - 栃木県陶壁事情」本 （文星芸大出版）
　　83 回新制作展委員長
2024　栃木県文化功労者賞受賞

新制作協会会員　栃木県新作家集団会員
現在までに陶壁、エコガラスアート、モニュメント作品
合わせて、全国に約７００ヶ所設置

■ 主な陶壁作品
花王石鹸栃木研究所（栃木）
栃木県立博物館（栃木）
セントピア芦原（福井）
栃木県立栃木女子高校モニュメント（栃木）
東京大学理学系総合棟・小柴記念ホール（東京）
栃木県庁益子焼陶板プロジェクト（栃木）
京都府立医科大学病院（京都）
和泉市立病院（大阪）
カツデン中庭モニュメント（島根）
渋沢シティプレイス（東京）
栃木県庁益子焼陶板プロジェクト
「笑閻魔」駅前レリーフ（益子）
他

■ エコガラスアート作品
栃木県庁（栃木）
勧行寺本堂（横浜）
神戸市立中央市民病院 (兵庫)
庭のホテル（東京）
栃木県立宇都宮工業高校（栃木）
春日後楽園駅前地区再開発施設 (東京)
他